

国際英語論に基づくタスク・ベースの授業実践

学籍番号：249353

氏 名：松平 蒼慧

主指導教員：瓜生 彩子

副指導教員：Justin Pool

1. 背景

柴田ら(2020)は、現状の日本の英語教育が想定する「英語」は、母語の影響を限りなく排したものであるという側面が非常に強いということを指摘している。このような言語観は母語に対する劣等感につながり、言語を通して多様な他者とコミュニケーションを図るという英語教育の真の目的から子どもたちを遠ざけてしまう恐れがある。柴田ら(2020)はこのような母語話者英語の絶対視が内面化された言語観やそれをベースに為される教育を批判し、英語教育は言語やその背景にある文化、そしてそれを扱う人々そのものに目を向ける必要があるとした。

上記のような英語教育を達成に関して、「国際英語」という考え方がある。柴田ら(2020)によると、国際英語とは、英語が世界中に拡散された結果として世界各地で生まれた規範英語とは異なる英語を母語話者が用いる英語と同等のものとして扱おうとするものである。塩澤(2016a)は、英語教育における国際英語の必要性についても述べており、それを「呪縛からの解放」「積極的にコミュニケーションをとる態度の養成」「最終的に“My English”(「自分の英語」)しかない」の3つにまとめている。これらを総合すると、国際英語の授業は、英語母語話者の使う規範英語を話さなければならないという思い込みを払拭し、自分が話す英語“My English”に自信を持たせることを通して、国際的な場面でのコミュニケーションに積極的に取り組ませられるという効果を持っていると述べるができる。また、塩澤(2016b)は、国際英語に基づく授業の到達目標についても述べており、本論ではそのうち「国際的に通じる英語と通じない英語を認識できる」「“My English”(「自分の英語」)を肯定し、積極的に使うことができる」「国際的コミュニケーションストラテジーを使うことができる」「“My English”を実際使ってコミュニケーションをとることに喜びを感じる」「感情をコントロールする能力(affective competence)がある」の5つを実践の目標とする。

これを目標とした授業法としては、TBLT(Task-Based Language Teaching)を採用した。柴田ら(2020)は、国際英語論をもとにした授業は用いられる言語の形式ではなく、それを通してどのような課題を達成したのかが評価の基準となるため、TBLT との親和性が高いと考えられる。松村(2017)も、TBLT に期待されることとして、学習者が自分の持っている言語リソースを自由に活用できるようになること、そして学習者自身を不完全な目標言語使用者として自認してしまうことを避け、言語の使用者としての自信を育むことができると述べており、国際英語論が目指す事項と TBLT によって獲得される能力は大きく重なっていることがわかる。

これらを踏まえた本研究の目的は、上記の5つの目標を達成できるようなタスク・ベースの授業を実践し、生徒の様子を観察することである。

2. 授業設計

TBLT は、学習者ができるようになった事項を具体的に認識できる点、現実世界の文脈を意識してタスクをつくる点、英語の4技能5領域を横断する包括的な能力が求められる点が「パフォーマンス課題」と共通している。パフォーマンス課題をつくる際の授業設計について述べている西岡(2008)・西岡(2016)を踏まえて本論で実践する授業を作成した。

今回扱う単元は「English Interview」で、学習者は志願者役、指導者が面接官役として英語での面接を行う。この授業では、学習者の既存の語彙を軸として相手に伝わるような表現を考え、それを適切な形でアウトプットしつつ、相手の発話がわからないときは相手に特定の行動を要求することが必要であるということを永続的に理解することが目標である。

3. 「English Interview」の実践

3.1. 単元の目標

本論で実践する授業の目標は、「英語面接を通して、自分のこれまでの人生や学校生活を語ったり英語のやり取りを続けたりするための英語表現を知り、面接官との対話の中で活用することができる」「自分のこれまでの人生や学校生活を、相手にその良さが伝わるような表現を選択しながら話すことができ、準備していない質問に対しても、これまで学習した内容や表現を組み合わせながら適切に回答することができる」「自分が使うことのできる英語表現と向き合い、英語で言うことのできない内容を確認しながら準備を進め、自分の話す内容を面接官に好印象を持たれやすいものにしようと工夫している」の3つである。この目標は、国際英語論の到達目標を基準として定めたものである。

3.2. 振り返りシートの記述

授業を実践したクラスのうち1つでは授業後の振り返りシートを回収した。そこでは、英語使用へのハードルが下がったこと、自身の英語技能の成長や再評価など、肯定的な感想が見られた。授業に参加するモチベーションも高く、授業内で自身の語彙ややり取りの面での成長を実感することができているという趣旨のコメントが多かったため、“My English”の国際通用度を正しく把握することができた者もいると考えられる。これらを踏まえると、授業内で“My English”を使ってやり取りをすることで、英語話者として自信や、英語自体を楽しもうという感情を持つことにつながるといったことがわかった。

4. 結論と課題

“My English”の成長に軸を置いた国際英語を基盤とする TBLT の実践は、学習者に自身の英語をより肯定的に評価させられることを導くことができた。授業への感想の中には「楽しい」ということばを用いた生徒が複数名いたため、英語の授業の時間そのものに対して良い印象を抱き、今後の“My English”の向上へもよい影響を与えられたと考えられる。

今回の実践では、定量的な分析を行うために十分なデータを取ることができなかったため、今後は事前・事後の調査を行い、比較することにより、研究を行いたい。